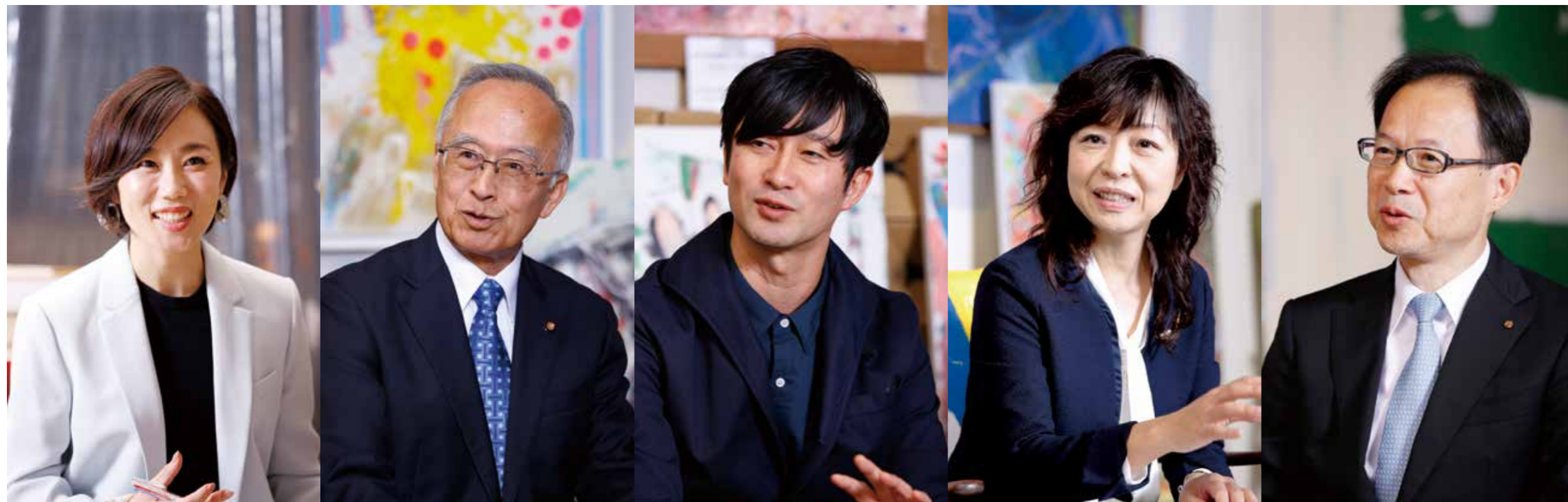


大分市がアーティストを育てる場、 チャンスの場となる



フリーアナウンサー
高嶋 和代

大分市議会議長
野尻 哲雄

画家
北村 直登

日本政策投資銀行大分事務所副調査役
佐野 真紀子

大分市長
佐藤 樹一郎



マーゲイト(英国) ターナー美術館

佐野さん、アーティストにとって、大分市はどのような都市なのでしょう。
佐野 大分アートフェスティバル2019「回遊劇場SPIRAL」開催時、公募によりシャッターアートを描いた県立芸術文化短期大学の学生さんが、自分の絵をい

ターネットにしています。今はネットの世界が広がって、自分の住む場所を選べる時代になったし、都市部に行く必要がなくなっています。都市部は情報量もチャンスも多くありますが、逆にチャンスがたくさん転がっている分、それが焦りにつながるんじゃないかと。僕は自然と触れ合いながら、自分のリズムで制作することがすごく重要だと考えています。

いろいろな人に見てもらえる場を与えてもらったのがすごくうれしかったと話していました。大分市が、こうしたアーティストを育てる場、チャンスの場となっても面白いのかもしれない。
また、アートに関わる人が増えることも大切だと思います。例えば、トイレナールから続く「ポールさん」。ポールさんは、アートやまちなかを紹介してくださるボランティアですが、活動を通じて、まちなかに深く興味を持つようになり、まちをすごく好きになって、自分から大分を発信したい気になったと伺いました。
イギリスにある人口約6万人の地方都市マーゲイトは、主要産業が衰退したところに建設された美術館が、市民を巻き込んだ芸術活動を地道に行うことで、徐々に市民がアートに関心を持つようになり、加えて、アーティストなど多様な人材が集まるようになることで若者が戻ろうようになり、まちが活気を取り戻しました。まちづくりにおいては、こうした関わる人を増やすことも大切ですし、アーティストにとっても、やりがいのある環境となるのではないのでしょうか。

野尻議長、大分市はこれまで数多くの芸術家を輩出していますが、いかがですか。
議長 日本画家の福田平八郎さんと高山辰雄さん、市出身の画家が二人も文化勲章を受章しています。高山さんが通った県師範学校付属小(現在の 大分大学教育学部附属小)の校門前には、福田さんの

アートをまちづくりに活かす

父親が営んでいた文房具屋があった、店先に福田さんの作品を飾っていたそうです。高山さんは幼い頃から福田さんの作品を見て感性を育み、画家になる決意を固めたと言われています。他にも国際的な洋画家である佐藤敬さん、竹工芸界初の人間国宝となった生野祥雲齋さん(別府市出身)なども大分市を活動拠点としていましたよね。



大分アートフェスティバル2019「回遊劇場SPIRAL」シャッターアート作品

北村さんの作品はドラマ「昼顔」にも起用され、知名度も全国区となっていますが、活動拠点を東京へ移さないのはなぜですか。
北村 僕は、販売の拠点をイン